

「記憶の更新」

記憶がいつも新鮮であるのは、記憶が掻き消され、新たに創られているからである。

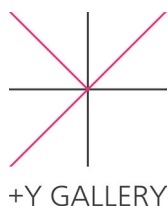
記憶を呼び出しあるものを描こうとしたとき、何某かの相手というものが存在する。それは伝える相手であるし自分である。絵を描くことによって、記憶を永遠に固定され得るかは、半信半疑である。新たに創作された記憶のその時点での記憶である。きっと、日々更新される新しい記憶が新しい絵を創作する。

セザンヌは、早朝からサント＝ヴィクトワール山の麓に出かけ、終日絵具を筆先にのせ山と対峙しつつキャンバスに描いた。描く以上に彼は山を眺め感覚を集中させて、山と一体化しようと多くの時間を持った。何かは彼の中に降りてくるのを待った。一秒一瞬ごとに変化する山（自然）と一体になろうとした。サント＝ヴィクトワール山はセザンヌが対峙した数だけ存在した。

版画の複数性とは、何であろうか。同一の版で多数の絵が刷られ、同一の記憶が多数存在するということなのか。同一の版で刷られても微妙な差異というものが有り得るから、厳密な同一の複数性ではない。しかし、曖昧な眼からすれば、皆同じ絵として見えるという習性の中にある。私はあえてその習性破りをすることにした。私には元の版で刷られた絵の記憶はある。それは生気を失った絵として、記憶が固定されてしまっている。私は元の銅版の墨線が消えるほど、油絵の具で元の絵が隠れるほどに彩色した。墨一色の世界が、色が溢れる世界へと変えてしまった。私は元の墨線の絵のイメージの欠片を思い出すことができる。彩色された銅版画を見る人は、元の墨線の世界を想像する自由がある。

(2018年4月)

北辻良央 KITATSUJI Yoshihisa



「北辻良央 全版画Ⅲ 1998-2018」

2018.4.24.Tue-6.9.Sat 火-土 12:00-18:00 日月祝休

+ Y Gallery

〒540-0024 大阪市中央区南新町 1-3-11-301

(高分子工学第一ビル 3F)

Tel : 06-4792-0011 info@plus-y-gallery.com

<http://www.plus-y-gallery.com>